

日本古代『論語義疏』受容史初探

高田宗平

The History of Acceptance "Lunyu-yishu" in Ancient Japan

TAKADA Sohei

はじめに

- ① 日本古代中世の『論語義疏』に関する研究の現状と課題
- ② 日本古代典籍に見る『論語』注釈書受容の実相
- ③ 日本古代に於ける『論語義疏』受容の諸相
むすびに

【論文要旨】

日本古代の『論語』注釈書の受容について、日本史学では『論語集解』のそれに関しては研究が見られるものの、『論語義疏』については等閑に付されてきた。このことに鑑み、『論語義疏』を引用する日本古代典籍の性格、成立時期、撰者周辺の人的関係を追究すること、古代の蔵書目録から『論語義疏』を搜索すること、古代の古記録から『論語義疏』受容の事跡を渉猟すること、等から、日本古代の『論語義疏』受容の諸相とその変遷を検討した。

『論語義疏』は、天平一〇年（七三八）頃には既に、日本に伝来しており、奈良・平安時代を通じて、親王・公卿・中下級貴族・官人・釈家に受容され、浸透していた。八〜九世紀では「古記」・「釈」・「讀」の撰者である明法官人によって律令解釈に、一〇世紀末〜一一世紀初頭に於いては皇胤である具平親王が「止観輔行伝弘決」所引外典の講究のために、更に、一一世紀前半では明法博士惟宗允亮が朝儀・吏務の

先例を明らかにするために、右大臣藤原実資が有職故実の理解のために、それぞれ『論語義疏』を利用していった。また、釈家では、九世紀で空海、一〇世紀で法相宗興、福寺の中算が『論語義疏』を利用していったが、一一世紀後半に至ると、仏典を始め多様な日本古典籍に『論語義疏』が利用された。そして、一二世紀前半では、左大臣藤原頼長が幾多の漢籍を講読したが、その一つとして『論語義疏』を講読していた。就中、具平親王の周辺や藤原頼長の周辺に、文才に長けた公卿並びに中下級の貴族や官人である文人・学者が集まり、両者はともにそれぞれの時期の論壇の中心となつて、漢籍・漢学の講究・談義が行われた。そこに於いて、講読されていたもの一つが『論語義疏』である。

【キーワード】『論語義疏』、日本古代典籍所引『論語義疏』、具平親王、藤原頼長、漢籍・漢学の講究・談義